特集 終戦の日

8月15日・・・終戦

あの日から63年の月日が流れました。

しかし、戦争の傷痕はいまだ人々の心に残されています。

悲惨な時代を駆け抜けた3人の方々に当時の体験をお話しいただきました。

この体験談は私たちに〝平和〟であることの大切さを教えてくれます。

「この話は今までしたことが無かった・・・」

恒石輝悦さん（90歳・物部町舞川）

捕虜の爆殺

昭和16年であったろうか。私は満州黒竜江省虎林の満州第百五十部隊の沢田中隊（沢田悦馬中尉）の中隊員で、中支漢口に出張を命じられた。用務は蒋介石軍の捕虜500か600人を受領して、鉄道輸送で虎林に移送することであった。

虎林は、満州東部でソ連との国境地帯にある町で、高知の兵隊が守備に就いていた。移送した捕虜は、陣地構築工事の作業員で、近隣の強化工事に使われた。

ある日、中隊長から命令を受けた。それは「作業員の捕虜をトーチカに入れて爆破せよ」というものであった。命令は関東軍から出ていたと思われるが、陣地構造の秘密漏洩を防止するのが目的であった。兵隊というものは、上官の命令は天皇陛下のご命令と同義で、命令を受ければ生死を考えず遂行するものであった。人は数日接触しておれば情というものが湧く。ある者は妻か恋人の写真を見せてくれ、辛いと泣き嬉しいと喜ぶ、我々と同じように故郷に帰るのを楽しみにしている若者たちであった。トーチカに追い入れて戸を閉じた。この瞬間は、忘れられるものではない。今も彼らのしぐさを明瞭に思い起こすことができる。後は爆薬で埋没させたのであった。

郷土防衛隊

昭和20年3月20日、護土部隊の第八中隊（山崎操中尉）は、南国市前浜で敵の上陸に備えていた。この日、四国沖には連合軍の機動部隊が来て、本土に空襲を繰り返していた。午後、鹿児島から「彗星」艦爆が数機で特攻攻撃をしたらしい。

午後7時頃、暗くなった浜で騒動が起こった。飛行機が落ちたというのだ。飛行機は堤防の前で大きく壊れ、2人が乗っていた。額に日の丸鉢巻、後席の飛行士は白帯で軍刀を背負っていた。衛生班が収容して病院に移送したように記憶している。また同機種が高知の練兵場にも降りて壊れた。

この頃、土佐湾は連合軍上陸の有力候補地と言われ、「故郷を守るために死ぬ」と、悲愴な決意をしていたし、高知県民も防衛戦に組み入れられていた。高知市も焼かれ戦場の様相を帯びていた。8月15日、玉音放送があったが、すぐに備えを解いたのではなく、連合軍が高知に入って兵隊の仕事を終えた。それでも、真偽雑多なウワサが流れ、もしもの時には、死なねばならないという潜在的な考えは尾を引いた。

軍国日本の狂気の時代に、我が青春は過ぎていた。

中国
イマン
虎林
ソ連
日本海

岡村守浩さん（88歳・香北町根須）

「人命は人種や老若では違わない」

兵役

昭和15年12月10日、高知歩兵第四十四連隊留守部隊に入隊した。3カ月の初年兵教育を終えると、兵科の希望調べがあった。体格が良い者は砲兵、射撃成績の良い者は歩兵で狙撃手、大工経験のある者は工兵、私は家業が木材商で牛馬に親しみがあったので馬の兵を希望した。教育指導の古兵が適性を見ていて、アドバイスを受ける者もあった。20歳の若者でも仕事をしている者ばかりで、いろいろな得意分野を持った者が集まり、世の縮図を見るようだった。

中支派遣

第二百三十六連隊（亀川良夫大佐）は、中国湖南省岳陽を中心にして駐屯していた。配置されたのは第二大隊（坂口裕少佐）大行李班で、大隊本部の資材を馬で輸送するのであった。戦場は道のない所が多く、日本軍では、馬輸送を主力にしていた。

軍では馬は兵器扱いで、古兵の口癖に「お前たちは一銭五厘（通知ハガキ代）だが、馬はそうはいかん。大切にせえ」というのがあった。朝、第一番は馬糧をやり、厩舎の掃除をして馬の状態を確認する。排泄で内臓の状態を見て、ブラシをしながら脚腰の状態を点検する。次が自分の洗面や食事である。馬を出すことがあれば、馬の出動準備をするが、蹄鉄を確認するのは必須要件であった。先輩古兵のお世話、野外演習、帰隊すれば休むのは馬が先で、次に先輩のお世話、その次が自分のことで、一日は多忙のうちに暮れるのであった。

第二次長沙作戦

昭和16年12月、太平洋戦争へ突入し、敵を牽制する作戦が行われた。敵の拠点が置かれていた長沙を攻撃するもので、軍は幾本もの線となって長沙を目指した。

敵は山上や渡河点など有利な地形で抵抗して後退した。山上の敵小部隊などは捨て置いて突進したので、敵は残されていた。私たちの部隊は、後方から本部を追及する武器の少ない部隊だったので、よく敵の襲撃を受けた。今のゲリラ戦である。

1月3日、山間の三尺道を通信機を搭載した馬を引いて進んでいた。前方300㍍ほどの山上に敵が動くのが見えて、道の側溝に伏せた。射撃が来ないので、敵状を見ようと頭を上げた途端にチェッコ機銃の集中射が来た。照準して待っていたらしい。頭を焼け火箸で叩かれたように感じた。瞬間、故郷や父母が脳裏に浮んだように思う…。

中 国
（湖南省）
○漢口
●岳陽
○長沙
○衡陽

衛生兵に頭を抱えられて目が覚めた。一週間がたっていた。「頭部擦過銃創」と知る。弾が頭蓋骨を削り骨が跳ね飛ばしたような傷になっていた。頭部の傷は出血が多い、また1センチ違えば、英霊となって村葬の栄誉に浴することになったであろう。衛生兵の適切な処置に感謝し、郷土部隊で近郷の者が多かったこと、担送してくれた中国保安隊の方々に感謝しながら運を感じるのである。2・3発が来たと聞いたから、私は戦死していても不思議ではない。その後は、漢口陸軍病院や内地の療養所を転々として、兵役免除となった。

私の義務としての兵役は、傷痍軍人となって不運だったろうか。否！幸運であったかもしれないと思う。郷土の部隊は、その後に幾度もの激戦を交え、ニューギニアやビルマに動員された私たちの世代は、多くの戦没者を出しているのであるから。

人の争いや競争に武器を持って相手を制圧する行為は、人命や財産を失い恨みを生むだけであろう。戦争の実態は、テレビやゲームで見る相手の反撃が少ないものではなく、相手も全力で向かって来るのであって、一方だけから見るのとは違う。私は、日本の軍隊の中国や東南アジア諸国での行為、加害者の立場を検証し、後世に伝えることがもう少し必要と考えている。人命は人種や老若でも違わない、自分と相手は同等と思うからである。

小松勇吉さん
（85歳・物部町仙頭）

ノモンハンの激戦を偲ぶ

私の戦争は、昭和16年2月、満蒙開拓青少年義勇隊に参加することから始まった。

昭和17年8月、吉林省吉林で徴兵検査を受け、ハイラル（海拉爾）国境守備隊に入隊した。ここは、満州の北端でノモンハン事件の激戦が行われた地域で、ベトンの要塞が築かれ、外蒙（モンゴル）の砂と草原がウネウネと広がっているばかりであった。

昭和19年10月、第二百五十五連隊に転属したが、任地はハイラルであった。ある日、使役で病院の死亡者を火葬することになった。病院から1千㍍ほどの所に野戦火葬場が30㍍四方ほどに掘り下げてあり、降りて整地に掛かった。スコップを踏むと「ジャリッ」と音がして入らない。手で掻いてみるとホックとボタンばかりである。

場所を変え、30センチまでは確認したが同様であった。4カ月間に8千の兵員が失われ、指導的な立場で生還した者には、自決が強要されたと聞いているが、ノモンハンの兵站基地であったここで、何人の兵士が火葬されただろうかと考えた。今も大草原にあのボタンは埋まっていると思う。

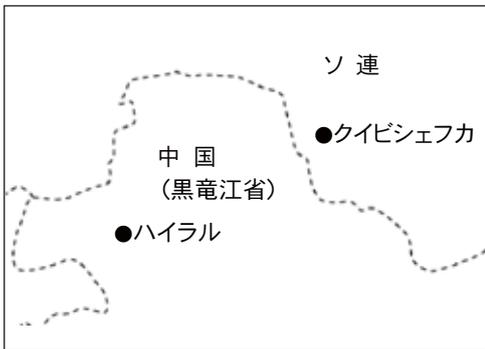
「平穏な日々がどれほど貴重なものか」

シベリアの苦闘

孫呉の南方陣地で、8月20日、日本の敗戦を知らされた。若いソ連女性兵に連行され沿海州クイビシェフカ近くの収容所に入り、赤松の伐採作業に従事した。ソ連が不作の年とも聞くが、食糧支給はひどいもので、朝食は玄米の塩スープが飯盒蓋に一杯、昼食は黒パン200グラム（入浴石鹸大）、夕食は、また玄米スープであった。これでノルマの巨大赤松伐採の重労働に就いたのであるが、西洋大型ノコを一日引く作業であり、力を入れないと伐れず、2人の息を合わすことでも能率が違った。栄養失調、防寒着で敏捷さを欠いて事故になり、日に4・5人の死者が出た。寝ていて死亡した戦友は、冷凍マグロに似て、強く扱うと腕が折れて飛ぶのであった。見る見るうちに痩せ、誰もが明日の命の保証の無い時期を過ごした。

零下40度に風が加わると寒さを倍にも感じた。トイレは排泄物が塔状に積むので、定期的にツルハシで崩し搬出するが、雪片が飛び、服に付いて暖房の場所では溶ける。この作業は記憶に残る作業であった。吐息で目が見えなくなる。これは息の水分がまつ毛で結氷して目を塞ぐ、一定に目を擦る必要があった。加えて、ソ連兵が数百人を点呼するのに2時間ほどを要するのには閉口した。日本人小学生の九九ができなかった。冬季の極寒の中で、朝晩の2回を納得するまで立って待つのであった。

昭和21年からは、ソ連の復興が軌道に乗ったのか、徐々に改善され、石炭運搬、工場の作業、農場作業も経験した。昭和22年9月、列車に乗せられ、ナホトカに入った。いよいよ「ダモイ」（帰還）である。しかし、日本人の政治局員から「元気がいいから、もう少し働いていてください」と宣告され、ナホトカ港の築港工事に就労した。

ソ連
●クイビシェフカ
中国
（黒竜江省）
●ハイラル

昭和23年5月、ナホトカから「信濃丸」で待望の舞鶴の土を踏んだのであった。

私は、この経験から故郷で健康に朝日を拝み、いつもの夕餉を摂る平穏な日々が、どれほど貴重なものであるかを知っている。これが「老人のたわ言」と思う方には明日が知れない日々を経験するのが一番の薬であろう。

なぜ戦争を起こしてはいけないのか、この体験談を読むことで、感じとれたのではないでしょうか。
同じ間違いを繰り返さないためにも、感じたその思いを後世に伝えていくことがとても大切です。

３人の方々には、大変貴重な体験をお話しいただきました。ありがとうございました。